



欽定
良枝集



特
へ4
4367
2上



松代
文庫

背見

講林良杖集目録

今私書之

第五 有由緒哥 下卷又十八ヶ条

一 浦邊六箇事

二 松浦仇用作
領中庵山事

三 松浦河釣鮎
し女事

四 様見事

五 湯見事

六 菟名貞慶女の懸擲
り付生田川の水まじり

七 せての下事

八 ねらりの事
くらくらねらりの事

九 湯邊主賜楯
事

十 奥列金花山事

十一 辰の信松事
十二 湯邊寺の松事

十二 湯邊冬末路
の橋事

十三 ねとりの神事
お葉事

十四 ねらりの事

十五 湯の赤中
の事

十七 湯邊の松事

十八 湯邊の松事

十九 山もみねの松
事

廿 湯邊の松事

廿一 湯邊の松事

廿五 湯邊の松事

廿六 湯邊の松事

廿七 湯邊の松事

廿九 湯邊の松事

卅 湯邊の松事

卅一 湯邊の松事

卅二 湯邊の松事

ちかみりていりていりていりていりていりていりていりていりていり
 としあきものしりていりていりていりていりていりていりていりていり
 たりていりていりていりていりていりていりていりていりていり
 一とわわらとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 のまわらとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 中とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 りとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 ぬすりていりていりていりていりていりていりていりていりていり
 敷^キ百とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 術とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

てらやなりていりていりていりていりていりていりていりていり
 加みぬりていりていりていりていりていりていりていりていり
 ぬすりていりていりていりていりていりていりていりていりていり
 ぬすりていりていりていりていりていりていりていりていりていり
 うひて海とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
 夏^ナ風^{カゼ}吹^フりていりていりていりていりていりていりていりていり
 松^{マツ}浦^{ウラ}作^サ用^ヨ佐^サ領^シ巾^ヒ麾^エ山^ノ事^ニ

^チ
 石^{イシ}欽^{キン}の^ノ夫^{ウツ}全^{ゼン}此^{コノ}時^{トキ}人^ノ伴^{トモ}佐^サ境^{キハ}比^ヒ古^コ遣^{セン}唐^{カラ}役^{ツク}主^ノの^ノ所^{トコロ}
 左^サ太^タ右^ウノ^ノサ^サテ^テヒ^ヒコ^コ
 信^シ良^{リヤウ}

豊後守の御書

松浦山家の御書

編み

ヤシロノラクラ

故人追和の書

肥前守の御書

五

同

万

わが御書の御書

松浦河釣鮎し書

同

右様方の御書

とある御書の御書

とある御書の御書

とある御書の御書

とある御書の御書

同

同

同

同

松浦河釣鮎し書

松浦河釣鮎し書

松浦河釣鮎し書

松浦河釣鮎し書

櫻児事

春之辰かき小せん家母一撫乳のあはる家母お 狂あ
 小かみのかき小撫乳さうはじもあ人のあはれ同
 衣じう様子とあ女わ二人狂ふ思ふかき
 幸らじ男命ととてわそひあ女さひき
 昔より一女あうて二日ああひさすはの
 心そ又やうかかうさうさうかうんよう
 心く林の中へ入くよさうひさきそはあ
 おさひひぬ二人乃男思れ海とささかひ
 形とてあはくまよさうかきさうさうのゆり上

繡児事

小かきさうさう
 小かき池一う先乳あさうひあは水ひさ一男
 前乳あさうあさああはあはあはあはあは二男
 是家乃山ああああああああああああ三男
 ああああああああああああああああ
 女の名とらうさうさうさうさうさうさうさう
 一女乃乃信やとああああああああああ
 さああああああああああああああああ
 形乃池ああああああああああああああ

好ふもあつてはなしく後あふふつら

菟名貞女ヲナナヒメ與擗事ヒツキト日本紀三ヨム 白河川のあたりに射す

あつたふとぬこの妻とあつたひし女のおつた

下 意乃金のひし女おつたふとぬとあつた

日 清のふとぬの技ひし女とあつた

右之首好くもあつたふとぬとあつた

わつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

とわつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

独りしつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

とあつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

おつたふとぬひし女とあつたふとぬと二人好く

てゆくからさういふにまをれと討つてぬいて
じふふとさういふに母の心も死すべから
とまじくおのれをさういふに母の心も死すべから
今をさういふに母の心も死すべからぬ
わが心も死すべからぬ

はなはたおのれをさういふに母の心も死すべからぬ
とまじくおのれをさういふに母の心も死すべからぬ
今をさういふに母の心も死すべからぬ
わが心も死すべからぬ

あつておのれをさういふに母の心も死すべからぬ
とまじくおのれをさういふに母の心も死すべからぬ
今をさういふに母の心も死すべからぬ
わが心も死すべからぬ

とらぬし書一は皇中使と異國にけりし時と藤
王乃而みからあるをよひ引記久乳波久乳意と
以三人の言ひを紙にうつて其由(事因)なり
事也たなりく見記意補記の事なり

九 カウキノヲキキ
葛珠王賜橘姓事

夏六
橘の事と云ふは兼光の橘也其由は海に記す
右記に或る皇天年八迄冬十月并子辰辰
緒兄云々云々云々云々云々云々云々云々
約なり時記云々云々云々云々云々云々
ら性不先云々云々云々云々云々云々云々

この時の事記す兼光の事なり

夏八
十
奥列金衣山事

とらぬし書一は皇中使と異國にけりし時と藤
王乃而みからあるをよひ引記久乳波久乳意と
以三人の言ひを紙にうつて其由(事因)なり
事也たなりく見記意補記の事なり

夏九
十一
葛珠王賜橘姓事

とらぬし書一は皇中使と異國にけりし時と藤
王乃而みからあるをよひ引記久乳波久乳意と
以三人の言ひを紙にうつて其由(事因)なり
事也たなりく見記意補記の事なり

おもしろい時

三橋の山は小島と云ふも、
石作務の秋と云ふ門の
ついで三橋の秋の詞は
くの人といふ

三橋の山は小島と云ふも、
我有れはと云ふは好ら
ゆり雪小秋のわ紙書か
加流もやくらふ後と云
後



首尾久未踏橋事

附と云

中々入らるる小島と云ふ
るにやあやくらふは

月

林

若橋の山の影りも
けしやと云ふは

石くあらる橋の身
の段乃優安塞ふ
と云ふは小島
は三橋の山は
と云ふは小島
わり三橋の山は

此書よりゆりあつての税よりゆりあつての税
わらふとて悲乃の言の方違ひなりきゆりあつての税
おしりふと八言の法抄を是と名付の申すも余れ
お給ひの申すの申すなりきゆりあつての税
と名よふゆりあつての税なりきゆりあつての税
我ゆりあつての税なりきゆりあつての税
御旨の存分より通作の法抄なりきゆりあつての税
と名よふゆりあつての税なりきゆりあつての税
右取帳より我税よりあつての法抄なりきゆりあつての税
いふ義わらへ後税なりきゆりあつての税

あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税

皇居より補百有方合儀也

かりの法抄なりきゆりあつての税

名方集なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税
あつての税なりきゆりあつての税

わさきあつしやうふ小形くゝいさふさふまはるゝ

物子かひやうふさうくさふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

志教隆く教教張右集よ方集乃物まあ風家二三

りよ及教教火の篇。入り又六百あま合後成

公判。親ま山田乃為田源より人のけやと誰者

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

煙炎者可為一爰胡麻し。心家の杖煙乃洞深

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

あふまふあふまふあふまふあふまふあふまふあふまふ

やうなもくし流よとのれと鳥ひさし
いさふつらまきやいしあひま
毛とぬいてわらわの月よな
しらぬわらわのわらわのわらわ
日誦入流よわらわの雄也わらわの
尾らぬにや推のりぬにむさる

^左 日らぬにむさるのりぬにむさる
いさふつらまきやいしあひま
尾らぬにむさるのりぬにむさる

五 鳩ゆく林事

鳩ゆくの林の事とてあまのりぬにむさる

右鳩ゆくの林の事とてあまのりぬにむさる
とわらわにむさるのりぬにむさる
左鳩ゆくの林の事とてあまのりぬにむさる
とわらわにむさるのりぬにむさる

^卯 鳩ゆくの林の事とてあまのりぬにむさる
とわらわにむさるのりぬにむさる
^卯 鳩ゆくの林の事とてあまのりぬにむさる
とわらわにむさるのりぬにむさる
野まの流る

朱どうひくわくさしてこれ後とて女表
才ふねまは二粒のるうまら幸好のしる紀
ゆらまひとせれしきしうりーんら内典
外典の後おきわるせぬく皆のこころしひ六
女のみそく事とるありふり記さうら山ゆは
しはさうらてぬさくはくしひゆらとて
まじらぬよぬさふつまき風をのむせまふの
あせぬ^{せあ}もわらうんをぬかぬのりこころのり
われ

六三 錦木事

お珍はみけふぬ今もいふまじぬ縁や神さあ

思ひのうかそむの綿されみけあさてなうこ
流はより極ゆかおとせと極らとぬの思ふいふか 遠房 永美
綿まがそまを極がふかぬの思ふあひのりや 徳母
おおきい二流をわはれしひもの男女よりんて
父と母の事いぬて一尺かりよふと海ういぬ
とらそそ女の門よりまことわんと思ふ時ふら
よぬく入也わうし極ふふふら今ふふら
ら何ふふら極ふふら也い外原のふと綿木
しう流わら神中極うららるせつ
六四 幸ふの思ふ事

より故よ祀とらとていふ事あり祀とらふん也
然も同治ありしとていふ事あり祀とらふん也
川形也とれよとていふ事あり祀とらふん也
とら祀とらふん也

及衣身之妻事 付神とていふ事

万十一 同
白妙風とていふ事あり祀とらふん也
同
白妙風とていふ事あり祀とらふん也
同
白妙風とていふ事あり祀とらふん也

同事也

廿七

河社事

神の事あり祀とらふん也
右来一之流とていふ事あり祀とらふん也
て川社もとていふ事あり祀とらふん也
集来権院代河内親王御所風流あり
祀とらふん也
加社とていふ事あり祀とらふん也
石河屋ありていふ事あり祀とらふん也



と記すも... 彼...
お... 海...
の... 事...
門... 事...
布... 事...
ま... 事...
あ... 事...
ま... 事...
あ... 事...

同... 同...
あ... 事...

石... 事...
お... 事...
あ... 事...
あ... 事...

川... 事...
あ... 事...
あ... 事...
あ... 事...
あ... 事...

あ... 事...
あ... 事...
あ... 事...

共九

既しとて海へ入らんとて今更の地へ
三度二とてふとてあらぬ先とていへり
此海よりいへり也又一説は眼の神平持然
しとて衆のハ是用約ら也
ゆくとも九年の事

^ほ今んは此の事とて教ふ事約ふ事下りて
ちいぢ人のしとていへり今て約ふ事
りともわ也とて久く海らあらぬ
から此の事とていへり今て約ふ事
あまらりともいへり今て約ふ事

かゝる事なりとて流しりか目ハ女之也
此の僻衆抄に換波入るに縁約はり流し
る事なりとていへり今て約ふ事
りともわ也とて久く海らあらぬ
から此の事とていへり今て約ふ事
あまらりともいへり今て約ふ事

石房わいさる男とよりきおわらるるあぬらぬす
のたぬらるるよれ敷いさるるたれらのあぬら
ふあどわく事やん曉の明れおくくらのあぬら
わらく事やんらるる

わらく事やんらるる
石房わいさる男とよりきおわらるるあぬらぬす
のたぬらるるよれ敷いさるるたれらのあぬら
ふあどわく事やん曉の明れおくくらのあぬら
わらく事やんらるる

傳記

四

八福録

傳記

事とてや鴨の明れいさるるあぬらぬす
のたぬらるるよれ敷いさるるたれらのあぬら
ふあどわく事やん曉の明れおくくらのあぬら
わらく事やんらるる

今も思ひてあそびのまにまにあそびあそび
 せせはしほいそいそいそいそいそいそいそ
 第六の二葉開白れに事とてあそびあそび
 今一ふたのちてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび

第五の歌

八幡の歌
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび

今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび
 今も思ひてあそびあそびあそびあそび

又隆海河室繁く、わが住居の人の神代
の橋より神代は海より、一敷は、いふに恒を明
神の由よりなり

^{長七} 子もゆりて海に、さるるが、も幸く、思ふに、
右に、一、今集の一、中、より、
すわり、又、橋、の、物、終、り、の、わ、ら、を、
方と、け、り、但、之、長、の、故、物、終、不、可、用、中、
ひ、と、む、ぬ、人、を、
神代

武隈松事

我乃も、
我乃も、

右奥列、
し、り、て、
あ、る、あ、の、わ、ら、を、

右、
右、
く、海、の、松、を、

武隈松、
右、
ぬ、ま、ら、
上、
徳、因

杉をゆりきりたれしゆりきりし人
押お人唐波唐事

ナ

わしをられしゆりきりし人
右祠之押お人丸の巻のしりきりし人

同分八

志に三角拍事
神風やしのふらふらひくひく神をいしてさる後
右三角拍とハ舞事さるひくひく伊勢大社事
三角拍とハ舞事さるひくひく伊勢大社事

中納言後家_{志に三角拍事}

わしをられしゆりきりし人
今よりゆりきりし人又日お礼のゆりきり
舞事式ハ三角拍とハ舞事さるひくひく伊勢大社事

志に三角拍事
志に三角拍事

後台

志に三角拍事
志に三角拍事

志に三角拍事
志に三角拍事

長春下

志に三角拍事
志に三角拍事

志に三角拍事
志に三角拍事

右親云云入らばよ女の花をくわりのけりとも
てはつりーきり

^{右様下}

心はよせのむげうとあふい流すもわぬ

春道
列樹

右親云云これ山越あてへある也とてよ
白河の湯のこころうらやうてあま花はよと
笑あう道也とこれ山越がまふれりよと
うらやう花はあつた良百とよの春れ花よと
あはれあうらよ百とあふ念よと
堀川乃百とて例おせると云く

^{右様}

名とよひて若あつたよ花はあつたあつたあつたあつた

四三

右親云云たつたあつたあつたあつたあつた
けりよとてあつたあつたあつたあつたあつた
わたりとてあつた

^右

おれとてあつたあつたあつたあつたあつた
たつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

春道
列樹

右取らうとくしきしは海もぬくはれし
ふしきしつらるるしきしきし

拾の道はぬと人あはれしききし家よりたれた

右取らうとくしきしは海もぬくはれし

野中ノ信ノ事

七の野中信はぬと人あはれしききし家よりたれた

右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ居ルニ時ニ

右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

拾の野中信はぬと人あはれしききし家よりたれた

奥義集ノ同撰ノ事

右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

の野中信はぬと人あはれしききし家よりたれた

四ノ事

五ノ九右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

ひわらふしきしは海もぬくはれし

右野中ノ信ハ海ノ邊ニ居ルニ時ニ海ノ邊ニ

藤田松ノ事

いづれもあつてはあつてのこゝろにふたつあつたかゝつていふこと
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

四七

小松の木の枝はひくさき

五十

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ
お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

四八

お志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

五二

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

四九

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

乃志乃の柱は楠木の二つとていふらむとていふ

幸乃わるとませ

五

城通明神幸一

七二（カ）曲（ラ）ワタリ

右は納言枕もよみおほし世もそわらわらん
あゝあゝいし酒とららるるびとをんしり町
七曲のこかりらるる中りらりて厚心よわぬ
さくらららららららららららららららららら
りびらららららららららららららららららら
舟中おららららららららららららららららら
ほそらららららららららららららららららら

城と入らるるのこがらららららららららら
わららららららららららららららららららら
政をほららららららららららららららららら
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
からめららららららららららららららららら
けららららららららららららららららららら
まららららららららららららららららららら
のあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
よふらららららららららららららららららら
人ららららららららららららららららららら

あつたまをたかきしめりておぼくも
とておぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも

つらきあやも志ぬらんをわらへぬと
右坂通の井はゆか黄之池水園と
後并ふは事誤るは扱也と
すまはしかりと奉

集りて不^レ可^レ也



姨言^レ山事

つらきあやも志ぬらんをわらへぬと
右坂通の井はゆか黄之池水園と
後并ふは事誤るは扱也と
すまはしかりと奉
あつたまをたかきしめりておぼくも
とておぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも
たかきしめりておぼくもたかきしめりて
おぼくもたかきしめりておぼくも

しめしめ
さね
と
山
ら
ひ
き

五

き

わ
後
日
女

五

き

わ
後
日
女

て内裏の御用を御しつゝとふりらむ事
と給りてとよみおろしあつ内相^御友系^後純子
勅と申りてとよみおろし縁一約と賦せしむ
内中御事傳言祿家おろしつゝ秋也びむ
この秋くわら後頼朝の御事と申しつゝ
み目れ松を引具しつゝ此の御事と申しつゝ
今日の御事と申しつゝいづれ又と申しつゝ
将今おむしつゝ此の御事と申しつゝ又松と申し
此の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
又能因は神の大御の御事と申しつゝ

系松の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
中より此の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
といつゝ御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
わりの御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
事と申しつゝ



此の御事と申しつゝ

此の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
右の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ
後今相因は神の大御の御事と申しつゝ
此の御事と申しつゝ此の御事と申しつゝ

そとそとらるしくみくら申衛人将茂原に
すわりし一時的のちと見えぬ

五六

かこまげぬ月設とかなり也のうりまうて丸

心也又カヤクニケタルニモイハリ

万々

雪風あつふ林の山後へさうれ花のそ花とまげぬ

けあ梅れ花乃咲るる様はむは月まじりぬ

ついでいする又梅のむれ花まじりきくららめを

あつる也

なま風神まじりし万葉集よの後松達原よのうらたに

のちと花もさうり花もさうりあつるらるる海つるもれ

花にそらるる後今まおはぬやとえつる也い集る

はあつるあつる花のむらさきもさうりあつる花つる

らるるあつるあつる花もさうりあつるあつるあつる

りあつるあつる花もさうりあつるあつるあつるあつる

もつるあつるあつる花もさうりあつるあつるあつる

あつるあつるあつる花もさうりあつるあつるあつる

あつるあつるあつる花もさうりあつるあつるあつる

あつるあつるあつる花もさうりあつるあつるあつる

三乃能中名也

故授命之為廣以自華中吾之華亦名也又之是
二本因一也之沙等子集教也

寬永廿年仲夏吉日

卷之二

呪

